

■（９３）中東からの仲間の悲報に思う

シリアの内戦取材していたジャーナリストの山本美香さんが銃撃されて死亡した。父親は私らの先輩記者で、「親父の背中を越え、はるか遠くに行ってしまった」などと語っていた。

どんな記者も、最前線で何が起きているかを伝えたいと思っている。政治や経済の世界でも、東日本大震災の被災地でも同じだ。道路が寸断されているならば、歩いてでも向かった。身の安全を守るのは当然だが、「１００％安全」になってからでは、本当の現場は目撃できない。

最近、記者の使命を原発事故で本当に果たしたのかと、米国人記者が著書を通じて日本人記者に問いかけている。現場よりも国や電力会社の取材に力を注いだのではないかと。線量計を持ちながら被災地を歩き続けた仲間が多数いた。ぎりぎりまで現場に迫ったと思う。ただ、それが十分だったのかと問われるならば、私らは引き続き取材を検証していかななくてはならない。

「３．１１」の被災地は２回目のお盆を終えた。津波から住民を守ろうとして殉職した消防団員や警察官も少なくない。それぞれの職業の人がどんな思いで仕事をしているか。中東からの悲報など、さまざまなニュースを通じて、子どもらに気づいてもらえれば、と願う。（山）